

その学習課題、ちょっとした工夫で変わります！

◇ 子どもから問いを引き出し、解決の必要感から設定した課題

<小学校1年 算数「たしざん」>

本時の目標が、「 $4 + 8$ の計算の仕方を考えることを通して、被加数を分解して計算する方法について理解する。」である時、下の2つの学習課題のうち、児童の学習意欲を喚起し、しかも本時の目標に直結する学習活動が予想されるのはどちらでしょうか。

A「 $4 + 8$ の計算のしかたを考えよう」

B「どちらに10のまとまりをつくらうかな」

Aは、どのような四則演算でもよく見られる学習課題です。しかし、本時では、Bを問うことによって既習と異なる方法があることに気付かせることができ、ねらいに直結する学習活動が期待できます。

問題 たまごは あわせて なんこですか

どちらを10にしようかな。

算数においてBのような学習課題を作るには、教科書のキャラクターのつぶやきが参考になります。

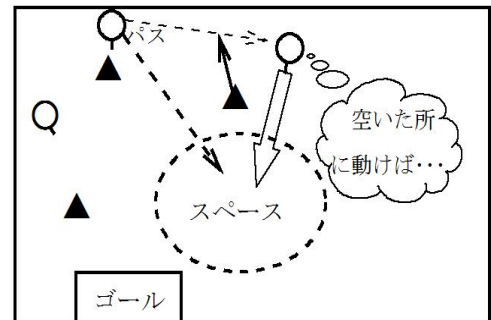
<小学校5年 体育「ゴール型ゲーム」>

T 前の時間のパスはどうだった？

C パスをすると相手にとられた。

C あまりボールをもらえなくて、ゲームにならなかった。

T パスをもらう側はどんな工夫をすればいいかな？



そこで、**学習課題を「どこに動けば、うまくパスがもらえるだろうか。」と設定**します。例えば、「パスのもらい方を工夫してゲームをしよう」と教師が一方的に提示するよりも、学習内容（空いた場所に素早く動くこと）について主体的に思考させ、運動させることができます。

技能を中心とした教科であっても、工夫することで子どもの問いを引き出して必然性のある課題を設定することができます。

<中学校1年 数学「正負の数」>

問題 バスケットボール部員8人の身長を、いろいろな方法で求めてみましょう。

A : 153 cm B : 148 cm C : 152 cm D : 155 cm

E : 150 cm F : 159 cm G : 147 cm H : 152 cm

問題をそのまま課題にしていけないでしょうか。

問題と課題は区別して提示したいものです。

「～について考えよう」の課題から脱却し、「なぜ～」「どのように～」など、子どもの問いのある課題を設定しましょう。

何を考えるか学習内容を示唆する課題を設定することが大切です。

上のような問題を受け、最初に小学校で学んだ身長の合計を人数で割る方法で答えを出します。その後、Aのような課題を設定する場合と、さらに小学校で行った「仮の平均」を定めて計算する方法があることを振り返り、Bのような課題につなげる場合があります。

A「もっと簡単に求める方法を考えよう」

B「どのように仮の平均を設定すると簡単に求められるだろうか」

Aは、漠然としていて、生徒自身がどのような学習をすればよいかととらえにくい課題です。それに対してBの課題は、仮の平均をどのように設定すればよいかを学習することが課題の中に示されています。また「仮の平均を最大値と最小値の間に設定することで正負の数が活用でき、簡単に求めることができる」というまとめとの整合性がとれる課題となっています。